

432) 通勤ラッシュ

その日は車両故障のために電車のダイヤが大幅に乱れた。小生はいつもの電車に乗るべく家を出たのだが、駅のそばまで来てダイヤが乱れていることを知って、ホームに駆け込んだ。いつもの電車の前の電車が数分遅れてホームに入ろうとしていたからである。ところが階段を駆け降りて行くと、突然手が出てきて我が行く手を遮った。「この野郎！」となぜか怒鳴っているのである。どうやらこのオッサンと体がぶつかったらしい。そして階段の下まで行くと今度は足が出てきた。我輩の向こう脛を蹴ろうとしたのだが急所を外れていて、たいして痛くはなかったが、ちょうど駅員さんの真ん前だったから、駅員さんも間に割って入ろうとしたほどだった。我輩は「この電車に乗りたいたいんだから」と言ったのだが、この50前後のいい年をしたオッサンは、そんな人のことはお構いなしである。寸でのところで電車のドアは閉まってしまった。こうなったらコチトラとても黙ってられない。駅員さんに「今この人が私の足を蹴ったのを見ていたでしょ。」と言うと、確かに「見ていた」と言う。こうなったらシメタものである。「じゃー傷害罪で告訴するから警察を呼んでください。」と言うと、今度はこのオッサンが、そわそわし始めた。我輩はシメシメとばかり、「あなたがどういう方かは知りませんが、もし私が告訴すれば、あなたは間違いなく会社を首になるでしょう。それでもいいですね。」という、急にこの男は土下座して、「すみません。私が悪かったです。許してください。」と言うのである。我輩はこの男をもう少しじめてやろうかと思ったが、同じ貉のしがないサラリーマン。これで許してあげることにしたのであります。